

子どもたち一人一人の伝え合う力を高める研究 ～「話すこと・聞くこと」の活動を通して～

I 研究の内容

1 研究の見通し

「話すこと・聞くこと」に焦点をあてて、その基礎を身につけることや表現の機会を意図的に設けることにより、子どもたちの伝えあう力が高まるであろう。

2 研究の内容・方法

【環境の整備】

- ・「Q-Uテスト」の分析を通して児童の実態を把握する。
- ・集会などでの発表を続ける。
- ・声の物差し等の活用を行う。
- ・外部講師等を活用し、意欲付けの機会を設ける。
(一例・アナウンサーを招いてのお話や放送局の見学)
- ・いろいろなコーナーを設ける。(一例・校長先生のコーナーやみんなの俳句の掲示)

【各教科などへ広げる取り組み】

- ・選んだ教科や活動での「伝える力」の理論研究と明確化を図る。
- ・授業中の教員による観察だけでなく、いくつかの方法を駆使して多面的に評価する。
- ・「伝える力」を明確にするために講師や指導主事を招聘して学習会を開く。
- ・「伝える力」に視点をあてた授業実践を行い、互いに学びあう場を設ける。
- ・「伝える力」を育てる授業改善やディベートの導入など場の工夫を考える。

【評価資料】

- ・Q-Uテストの分析と二回目の変容を見る。
- ・K13法を利用した分析
- ・アンケートの様子
 - ・昨年度に引き続きアンケートを行い変容を見る。
- ・授業観察や行事等での発表の様子
 - ・授業の様子や児童の行事等での発表の様子から変容を見る。

3 実践内容

「Q-Uテスト」の分析を通して児童の実態を把握する。

- 2回のQ-Uテストの後にK13法を使って各学年の分析をして全職員で確認をして自己指導にいかした。

- 外部講師として YBS 山梨放送の村上アナウンサーを招いてのお話を聞いた。また、その後、5年生は、放送局の見学も行った。
- 校長先生のコーナーや職員の趣味のコーナーなどを設置して教職員からも児童に伝えあう力を伝えた。

選んだ教科や活動での「伝える力」の理論研究と明確化を図る。

- 「伝える力」を明確にするために山梨大学の菰原・一瀬両教授を招聘して6月、8月の2回の学習会を開いた。
- 「伝える力」に視点をあてた算数・道徳の授業実践を行った。菰原・一瀬両教授にも参加していただきながら互いに学びあう場を設けた。

Q-Uテストの分析とアンケートから児童の変容を見る。

- K13 法を利用しての分析と昨年度に引き続きアンケートを行い変容を見ることでいろいろな課題を見つけることができ、それを授業や行事等での発表に生かすことができた。

II 成果と課題

1 研究主題

三年間の研究を行うことによって明らかに児童の伝えあう力はあがったと思われる。長期的な視点に立っての取り組みの成果が現れていた。本校における伝えあう力を定義し、それをつけるために全職員で取り組んだことも一助になったことと考えられる。課題としては、校内研で培った力をいかに書くことや読み取ること、他の教科など生活の中に生かしていくかやさらなる教師の資質の向上、個に応じた指導や苦手な児童への対応等があげられる。

2 研究仮説

全校や各学年ごとと焦点を当て、具現化することによって研究や児童の伝えあう力の高まりが見られたことは成果である。山梨大学の教授方から違った視点で松里小学校の研究にあったご指導をいただき深めることができ、それを児童の活動に還元することができた。算数や道徳に絞って研究を進めたことで理論をより構築できた。また、教師や児童の願いや思いを全職員で共有できたことも大きな成果である。課題としては、いろいろな表現の機会がある中でその活動を意図的に設けた根拠とアンケートなどから高まりは見られる。多くの検証データがあればさらによかった。しかし、多すぎても困るのでどの程度にとどめることがあげられる

3 研究の内容と方法

職員の個性も生かし、校長先生コーナーや職員コーナーによって職員側からも「伝えあう力」をふまえて、いろいろな情報を発信していったことや外部人材を積極的に活用し、児童に新たな視点を与えたことはこれからの学校のあるべき姿のように感じられる。児童の感想をみても大多数が好意的で、これからもやって欲しいという意見が物語っていた。声の物差し等の活用や話し合いのある程度のパターン化をしたことも児童の伝えあう力につながったようである。課題としては、校長先生コーナーのように一年間を通しての常時活動につなげることと、毎年簡単にできるようなものを考えるアイデア、外部人材の導入を計画的に全学年に位置付けることが望まれる。

(研究主任 川野和昭)